

手塚富雄著作集

中央公論社

手塚富雄著作集 第七卷

定価五〇〇円

昭和五十六年二月十日印刷

昭和五十六年二月二十日発行

著者 手塚富雄

発行者 高梨茂

印刷者 青木勇

発行者 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

番地 振替東京二二三四

©一九八一 検印廃止

手塚富雄著作集 第七卷 文芸・文化評論 目次

見てしまった人・川端康成

志賀文学における物象感など

有三文学の本性

作家スケッチ

白鳥の死と宗教

秋声についての覚え書

獅子文六氏の作品

白井吉見を語る

素十句のこと

秋桜子句寸感

菊池寛氏との談判

井伏氏の芸術雑感

阿部知二氏の思い出

いきと志気——高見順氏に感ずること

サイズが大きい——古井由吉

一〇三 一〇〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

文芸評論

伝統短詩偶感

二つの詩世界

日本文学は翻訳できるか

良寛における近代性

沈静期の文学

新文学の実証

文体論的批評

批評を批評する

性の文学を批評する——大江・吉行・石原諸氏の近作について

通俗性とは何か——文学の大衆へのかかわり方

文学における羞恥の問題

危機と文体

書評・鑑賞・その他

中島敦『李陵』

太宰治『斜陽』

106

106

113

118

113

113

114

115

116

117

116

100

107

114

114

117

太宰治によせる	三〇
梅崎春生『狂い胤』	三三
河上徹太郎『西欧暮色』	三四
中村光夫『明治・大正・昭和』	三八
ただ見るだけでなく——海外旅行書あれこれ	三三
みなぎる月光	三六
わが愛するうた——杉敏介『南山歌集』	三九
忘れ得ぬ断章——ストリンドベルヒの『稻妻』	四三
「良寛さま名品展」をみて	四四
文化の諸問題	
現在の日本文化の問題点	四七
ギリシャ的メランコリーによせて	四七
日本および日本人——敬神と反逆的柔順	五七
自然観二つ	六三
自然の自然と人為の自然	六八
我が国の文化についての断想	六九

「期待される人間像」を批評する

素人が素粒子研問題を考える

生きがいを求める風潮について

「日本の知識人」——リースマンの論説にちなんで

日本は「こども文化」か

日本人の遊びと本気

名目上の正義

一 演劇ファンが語る

日本演劇への管見

能楽に進展を望むなら

京劇直言

新団十郎の誕生

カブキの芸

天上のイエスの美しさ

しろうとオペラ観

わたしの音楽嗜好

二九六

三〇六

三〇八

三〇九

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

ことばの諸相

生きた日本語の開花をねがう

三八四

日々のことば

三八八

あいさつ

三九二

バカが起きた

三九四

談話の調子と心性

三九六

信州更埴市のこと

三九九

放送の朗読について

四〇三

文章について

四〇五

宗教をめぐる断想

四一三

あとがき

四六六

文芸・文化評論

見てしまった人・川端康成

川端康成氏の文学を語るには「十六歳の日記」から始めなくてはならないとは、多くの人が一致して言うことだが、私も躊躇なくそこから出発したい。どんなに年少のときに書かれたものでも、もうそれ以上どうにもならない完成度をもった作がある。むろん技術上の意味ではなく、書かれたものが書いた人の運命と決定的に結びついているからである。そこに見られるのは、作者の発展の可能性ではなく、その存在の中核である。「十六歳の日記」は、そういう種類の作品で、私たちはそれを読んで驚くのだが、驚くとともに川端氏という文学者そのものを理解することができる。おそらく川端氏の現在までの作品を読むことは、そこで得た理解を深めてゆくということに帰着すると思う。それは、むろん、川端氏が本来自己の担ったものを、作品の世界の中で静かに今日まで負いつづけてき、それによって比類のない現在の氏の文学に到達したからのことである。

田舎の旧家に、中学二年の著者と七十五歳の盲目の祖父がたった二人で住んでいる。その祖父が、明日をも知れぬ病いに苦しみ、うめきつづけている。近くの農婦が通って手つだいに来てくれるが、それが帰ってしまえば、いやでも、病苦の祖父とその孫の二人だけの世界である。死を前にして老祖父は、そういう病人たちのすべてが

そうであるように、もうほとんど人格ではなく、「物」としてのおそろしきをもった存在になっている。その病気の日々を、少年は、ある時からそのまま書きとめておこうと考えて、それを黙って実行したのである。「このような日記をなぜ私が書いたかということが問題になる」と、後年に著者は言っているが、おそらく少年は孤独の中で、意識的に自分の現在の孤独の境涯に刃をあて、刃をあてることによってそれを確かめようとしたのだと考えられる。文学的動機というような次元ではなく、今の言葉でいえば実存的な動機がひそんでいたのである。従って、苦しみがなく祖父をありのままに見、それになりたいして時には不親切である自分をもそのままに書きとめている。それは周囲とは孤立した世界の中のことである。少年は、その世界を逃げ出して、病祖父をひとり残してたびたび外に遊びに行きたがるが、こうした文を書こうとしたとき、彼はすすんで祖父とその世界を共にし、その中に祖父と同じく置かれていた自分自身を確認したのである。

「学校は私の楽園である。」少年が病苦の祖父との生活のなかで書いたこの一句は、ことに心に触れる。学校に出では、表面はそれほど他の子供たちと変わりなく見えるであろうが、この少年は内部に地獄を知っており、地獄の住人なのである。たぶん、多くの少年少女が、いつも学校という楽園のなかで、それぞれ何ほどの地獄をもつて遊んでいるのだらうと思うが、この少年は、それをこの一句で、自分のため、ひいては同類の多くの少年少女のために言ってしまった。その明るい楽園の中で、外見的にはその一人となっていて、その明るさを見ている少年の眼を思うと、祖父の病状を見つめていたときの少年の眼以上に、心を痛めさせられる。しかし、たぶんこの少年はメソメソはせず、じっとそれを見ていたのであろう。地獄の暗さを知っている少年の眼の前に、驚くほど明るい世界がある。生命のまひるといえる。少年は、その内と外とを同時に見る。内が暗ければ暗いほど、外はいよいよ明るさをまして見えてくる。その明るさを自分の世界にはしたいが、しかし、少年はその明るさの中に抱きとられているのではなく、その外にあるものとしてそれを見ているのである。こういうふうにして、

世界は、生命は、これからその多彩のかぎりにおいて、この少年の前に展開してゆくであろう。そして彼は、その生涯にわたって、外にある者として、それに眼を注ぎつづけるであろう。

この「十六歳の日記」という短い文章からわれわれの受ける感じは、その筆者が早くから見、しまつた人になっていることである。何を見たのか、その目的語にあたるものとして、上述の地獄ということばをふえんすれば、死、病苦、それにともなう醜、孤独等々の言葉をつらねることになろう。そういうものを見てしまった人が、あらためて世界に美を見あてるのである。よく川端氏の抒情性ということがいわれるが、充分の内包をもつていわれるのでなければ、文学者としての川端氏を取りちがえるおそれがある。川端氏の作品の世界が、なぜあのように美しいのか、私たちはその美をあらしめる、裏にあるものを思うことを忘れてはならない。

「十六歳の日記」の「あとがき」で、著者は、この日記を発見したとき、自分はそこに書かれているような日々の生活を記憶していず、それを非常に不思議に感じたと言っている。著者は、このことを、記憶されていない日は何処へ行ったのだという思いとの関連において言っているのだが、それについては暫くおき、その日々を記憶していなかったことが事実なら、それは主として、その後の若い生命の残酷な生長力ともいべきものから来たのであろう。しかし、記憶されていなくとも、何らかのありかたで著者の内部に沈んでいったことは、どうしても否定できないであらう。それに想起ということがある。「記憶されていない日々は何処へ行ったのだ」と思うことが、想起の第一歩である。そしてそれからの著者の生と文学にとって、想起が、その最もひろい意味で大きい問題となり、形なく消えていったと見えるものが、まったく思いがけない形でよみがえってくるのが追跡されるようになる。そのことにも後に帰ることになろうが、いまわれわれが意にとめておきたいのは、病んだ祖父父との体験は、全体として消えることはありえないということのほかに、その体験の裏には、それまでの著者の生い立ちの歴史があることである。それについては事こまかに述べるまでもなく、著者の年譜がそれを告げるだ

ろう。三歳のとき父と、四歳のとき母と、死別した。ひとりきりの姉とも離れて、祖父母のもとに引きとられたが、その祖母も、著者が小学校入学の年に没して、それから、昔流の数え方で著者の十六歳のときまで、祖父との二人きりの生活になった。そのあいだに、叔母の家に引きとられていた姉も死んだが、その姉とは別れてから一度会っただけだという。なんと多くのものが失われていったことだろう。失われながら、それらはみな何らかの形でこの少年の内部に沈んだのである。その中から、いくぶんかは、著者の意識された記憶の中に残っている。それらは氏の初期の短篇から大体をうかがうことができる。祖母の死の日に、少年は自分も意外に思うくらい祖母にやさしくしたと述べている。別れている姉の噂を聞いたこともある。おとなしく、利発であった姉は、養い親である叔母から、「お茶漬でもよく噛まない毒ですよ」といわれたとき、「ええ叔母さん、私はお湯でもよく噛んで食べています」と答えたということである。「私はこの話を叔母から聞いて、少し情ない気がいたしました」と「父母への手紙」という作品のなかの「私」は、言葉少なに言っている。おとなしく、殊勝で、けなげなこの姉のありさまが、ひとなかに生きる子供の、気持の上の努めのあわれさ、ふびんさを、伝聞ながらこの弟の心にじませたのであろう。そういう世間的なつめたい風に間接的にも触れる機縁は、その境涯上、おのずからこの少年に無縁ではなかったはずである。

しかし、私たちが川端氏の少年時代についていうとき、「孤児」という言葉をあまり感傷的にふり廻すことは、若干の注意が必要であらう。この言葉は著者自身も使ったものだが、同時にこの少年は、祖父母から、いっしょに住むただひとりの孫として、非常に大事にされ、甘やかされたぼんぼんだったのである。村としては貴族のクラスに属する旧家で、古い家系についての言い伝えもある。そういう場合にはよくあるように、あまり健康ではなく弱虫であることさえ、その子の生活と気持とを、周囲の同輩から離れた高いものにするのである。つまり、この少年はもともと貴族主義的気分のうちに育ったと見ていいと思われる。この点からも、彼は世に対して

距離をもつ人である。その上、肺の病気で死んだ父母に取り残されたものとして、自分をそういう貴族の一族の末裔の位置にある者として感じないわけにはいかなかったであろう。このことは陰に陽に、川端氏の文学のありかたに影響してゆくはずである。「例外も少しあろうが、現代日本作家だけを調べても、その多くは旧家の出である。」「旧家の代々の芸術的教養が伝わって、作家を生むとも考えられるが、また一方、旧家などの血はたいてい病み弱まっているものだから、残燭の焰のように、滅びようとする血がいまわの果てに燃え上ったのが、作家とも見られる。」「末期の眼」。こういう言葉にも氏の自己把握のしかたがうかがわれる。しかし、孤児にせよ末裔にせよ、それは前にも述べたとおり、外の世界と、その世界に燃える強い生命にたいして、距離をもつということである。距離をもつとき、人は距ひだったものに眼を注ぎ、それを慕わずにはいない。川端氏のこれからの文学は、その距ひだったものへの慕いを、つねに主題として進むことになったのである。

「伊豆の踊子」は、川端氏の作品のなかで、久しいあいだ最も聞えたものであった。その魅力は作品そのものが語っている。それでここでは、ただ側面から見ておくことにしよう。この題材は、著者が一高の学生のとときの経験にもとづくものといわれ、その中の「私」は、著者自身と同じ一高生として登場している。作品の中の世界と現実とを取り違えてはいけないから、ここではもっぱら作品に書かれてあることを言うことにしたいが、ひとり伊豆の山道を徒歩の旅をしているその一高生が、旅芸人と道連れになり、やがて下田まで一緒に旅をしたいと申し出て、それを実行したということは、ローマン的とか高校生的気まぐれとかいうより、じつは常識的にはほとんど不可能のことを、この主人公はしたのである。そして自分のしていることの意味合いを、この主人公は知らないのではなく、知っていて、「好奇心もなく、軽蔑も含まない、彼等が旅芸人という種類の人間であることを忘れてしまったような、……尋常な好意」をもって、彼らと道を共にしたという。それは茶店の婆さんが旅芸

人たちを「あんな者」と呼んでいるのを聞いた上でのことであり、村々の入口に「物乞い旅芸人村に入るべからず」という立札のあるのを現に見ていることである。しかも、彼はそういう旅の芸人たちから、自分が「いい人」として噂されているのを耳にはさむと、「世間尋常の意味で、自分がいい人に見えることは、言いようなく有難いのだった」と感じ、そしてそう感ずる由来を「二十歳の私は自分の性質が孤兒根性で歪んでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪え切れないで伊豆の旅に出て来ているのだった」と、説明している。この作品を初めて読む読者よりも川端氏の生い立ちについてより多く知っているわれわれは、氏がここで「私」に言わせている気持をよく汲みとることはできるのであるが、それにしても、世間尋常から離れた生い立ちから、世間尋常にはいろいろと強くつとめ、そして世間尋常を突き抜けて、物乞いと同一視される人々の中に、心のおもむくままに無差別にはいって行ったその若々しい突飛さを、ただならぬこととして驚きと感慨をもって見ないわけにはいかない。その若い心は、いうならば、早くもすべてを抱きとる広い内的空間をもつことに歩を進めていたのである。そしてそういうふうな歩を進めることができたのは、筆者の解釈によれば、その人が、前にも言ったとおり、すべての恐しいものを見てしまった人だからということになる。いまさら何を差別し、何を距てることがあろう。こうしてこの心は大きい自由を開いて行くのであった。川端氏の文学が、習俗や道徳や社会的拘束を越え、それを無視する方向をもつのは、こういうところから胚胎していると言うことができる。それはやがて背徳や不倫をも許容し、包括する世界となる。それは他の文学者によく見られるように、戦鬪的な反逆性から来たのではなく、ただ自己の内的世界を広くしようとする決意から来たのである。その結果、その世界は、一面において大きい寛恕の性格をもってくる。氏の作品の文学的体温、その冷暖については後に触れることになろうが、その作品の世界に怒りの表現が非常に少なく、あらゆる対象や事象をじっと見つめてはいるけれど、それを宥なだしていることは、氏の作品に親しむ者の誰もが感じないわけにはいかないだろう。